

北さつまきのこ村

鹿児島県阿久根市

設立 平成11年8月

会員 男7人

年齢 32歳～61歳 平均49歳

主なプロジェクト

- えのきたけを主体としたきのこの生産出荷技術の向上
- 共同出荷によるえのきたけ銘柄の確立
- 地域の活性化と林業後継者の育成

えのきたけ生産でむら興し

— 地産地消で所得倍増を目指して —

1. 地域の概況

(1) 阿久根市の概要

阿久根市は、鹿児島県の西北部に位置しており、古くから海・陸交通の要所として、海運業、商業等に栄えた街です。また、東シナ海の40kmに及ぶ海岸線や、遠く九州山地に連なる緑の大地に恵まれ、温暖な気候と相まって、新鮮な魚介類と四季折々に様々な農林水産物が生産されています。これらの豊かな自然を生かし、市では「人と自然が共生するまち」づくりに取り組んでいます。

土地総面積：13,430ha、森林面積：7,782ha (58%)

耕地面積：1,320ha (10%)

(2) 生産地の概要

えのきたけ生産が行われている米次集落は、阿久根市街地から南東方

向の紫尾山系へ車で約25分走った戸数26戸の小さな山村集落です。耕地も少ないことからほとんどの住民は、地区外に働きに出ています。えのきたけ生産はこの山間の地の利を活かし、紫尾山系から流れ出るきれいで豊かな水に着目して始められました。

2. グループ結成の動機

えのきたけ生産は、当初、数戸の生産者が個々に、県内外の市場に出荷していましたが、それぞれが、①生産調整ができないため価格が不安定であること。②ロットが少なくブランド化が難しいこと。③コスト縮減に限界を感じていたこと等の問題を抱えていました。このため、グループ化による共同出荷を通じた課題の解決を提案したところ、7名の生産者がこれに賛同し、平成16年8月1日に「北さつまきのこ村」を設立することとなりました。(従業員数45名うち30人は女性)

3. 北さつまきのこ村

(1) 概要

私たちのグループは、①えのきたけを主体としたきのこの生産出荷技術の向上。②共同出荷によるブランドの確立。③地域の活性化と林業後継者の育成。の3つの柱をテーマとして活動しています。32歳から61歳までの親子を含む7名の会員で、九州きのこ大会参加による情報収集、生産技術研修会や品質向上・規格統一のための勉強会を実施しているほか、ゴルフコンペや従業員を交えた花見、魚釣り大会などのレクリエーション等も行い、会員の親睦を深めています。

グループの活動がスムーズにしている要因としては、①えのきたけ生産という活動目標が明確で一致していること。②以前、当地域に婦人林産グループがあり、共同作業による協力・協業体制の必要性を認識していたこと。③平均年齢が49歳と働き盛りで、会員の年齢差も小さく意気が合っていたことなどが挙げられます。

また、内面には、これといった産業がない地域の活性化に自分達も貢

献したい。地域やグループの連帯感を強めたいといった欲求もありました。

後継者がいない上に農林業の生産活動が停滞している山村に取り残される寂しさの中で何とか自分たちの手で集落の活性化を図り、経済的にも精神的にもゆとりと潤いを得たいという切実な願いが込められていたわけです。

(2) 運 営

会員は7名で構成されており、会長1名、副会長1名、監査2名、書記1名を置いています。年会費は徴収していませんが、先進地調査費など必要な経費はその都度徴収しています。

年間の活動としては、毎年開催される九州きのこ大会への参加や生産技術研修会のほか、県内林研グループとの交流会やイベント等での「えのきたけ」の販売促進PR等を行っています。

(3) 取り組みとその成果

グループ結成以来、毎週水曜日には定例会を開催しています。定例会では、仕入れ・生産・販売計画についての検討のほか品質向上、収量増産、規格統一のための勉強を続けています。

熱意をぶつけ合いながらの討論もしばしばで、個人生産では体験できない程よい刺激を糧に、日々技術の研鑽に努めています。

また、グループ化を図ることにより、個人生産では対応できなかった次の課題が解消されました。①生産過剰などにより価格が不安定であったが、生産調整が可能となり、安定した価格と労務配分が可能となった。②ロットの拡大と品質規格の統一により、夢であったブランド化が可能となった。③生産原料の共同購入や共同出荷により資材購入費や搬送コストの縮減が可能となった。

このようなことから、以前は市場出荷がほとんどでしたが、今では県内Aコープへの出荷が過半を占めるようになりました。これはAコープの地産地消の取り組みや鮮度保持のニーズと私たちの生産・出荷体制が合致したからです。現在は、「郷えのき」というブランド名で私たちの

顔写真入りで出荷しています。また、市場出荷用については「北さつまえのき茸」というブランド名で出荷しています。

以前、鹿児島県の最南端の与論島のAコープに私達の商品が並んでいたという話を聞いたときは、感慨深いものがありました。「よか男にうつっちゃったが。」という冷やかしの電話も何本かありました。顔写真を載せることにより、いっそう責任感が高まり、「買ってくれるお客様の立場に立った商品づくりをせねば。」と心を新たにしているところです。

「北さつまきのこ村」というグループを立ち上げたことが、コストダウンにつながり、利益も向上し、計画的な生産も可能となったことから、時間的にも経済的にもゆとりを感じられるようになりました。

(4) 今後について

今後も、更なる技術研鑽を重ね、生産量を増やし、もっと地域での販売シェアを拡大したいと考えています。

また、いろいろなイベント等に参加し、えのきたけを使ったおいしい料理方法の提案や、しいたけ・ひらたけ・しめじ生産者と連携して、きのこ鍋を振る舞うなど、より多くの方々にきのこの美味しさを伝えていきたいと考えています。廃おがについては、現在、牛舎の敷料や園芸農家の堆肥として利用されていますが、将来的にはカブトムシやクワガタの生産にも挑戦していきたいと考えています。

4. おわりに

私達が行っているえのきたけの生産は、森林の産物であるスギおが粉を主原料とし、収穫後の廃おがについても牛舎の敷料や堆肥として有効に利用されており、資源循環型の職業の典型だと誇りに思っています。経営の安定化を図るため試行錯誤を繰り返しながら、苦労を重ねてきましたが、ようやく経営的にも明るい兆しが見えてきて、時間的なゆとりも感じられるようになってきました。

今後は森林の管理にも目を向け、スギ・ヒノキの手入れはもとより、

きのこの森づくりや、花が咲き、実のなる木々の植栽など多様な森林づくりを行い、多くの方々が気軽に森林の中に入り、いろいろな体験ができるような「きのこ村」にしていきたいと考えています。